

美術的価値が見出された地震火山資料

室谷智子(国立科学博物館)

§ 1. はじめに

研究者にとって、地震や火山に関する資料は、研究資料として、もしくは教育目的の理科教材として扱われるだろう。その一方で、歴史的な器械類や写真・絵図等は文化財や美術品としての価値も十分に持ち合わせている。今回は国立科学博物館(以下、科博)が所蔵する地震火山資料が、研究・教育目的ではなく美術的価値が見出されて扱われた例を紹介する。

§ 2. 関谷清景による理科教材「地震動ノ性質ヲ示ス雛形」

世界最初の地震学の教授である関谷清景は、1887年(明治20年)1月15日の相模で発生した地震の本郷での揺れを示す針金模型を作成した(関谷, 1888, 日本地震学会報告第5冊)。まずは地動を15倍に拡大したものを作成したが、その後、50倍に拡大した模型が教材として作成され(図1)、国内だけでなく海外へも輸出された。この50倍の模型は国内では科博に残されているものだけが確認されており、上野にて展示中である。

2017年度、この模型は京都国立近代美術館に貸し出され、目に見えない動きを視覚化した作品を考察するという企画展において4ヶ月ほど展示された。この模型が自身の創作源となったという現代アーティストの方の希望により、自作の作品とともに展示していただいた。地震資料が美術作品と並べて展示されたことで、博物館とは異なる客層の方々目に触れたという良い機会となった。

§ 3. 大正桜島噴火の様子を描いた油絵

関谷の模型を含め、科博に残る地震資料の一部は東京帝国大学地震学教室由来のものであるが、その中に、1914年(大正3年)1月12日から始まった桜島噴火の様子を描いた3枚の油絵が残されていた。これらは、キャンバスに記されていたサインから日本を代表する鹿児島県出身の洋画家・黒田清輝の弟子で、同じく鹿児島出身の大牟礼南塘、山下兼秀によって描かれたものであることが分かった。2枚は大牟礼南塘によるもので、うち1枚(図2)は噴火後、桜島の現地調査を行った東京帝国大学の地震学者・大森房吉の依頼によって描かれたものであることが、『大正三年桜島大爆震記』(1916, 鹿児島新聞記者編)に書かれている。この絵の写真が、「大森博士の依頼に依り大牟礼南塘画伯の描ける爆発当時の櫻島 見よ、閃々たる電光、流星の如き噴石」と紹介さ

れている。また、山下による油絵の裏面には、「大正三年一月十三日夜十一時之櫻島 鹿児島 山下兼秀」と記されていた。大森が調査のために桜島に到着したのは1月16日であったため噴火直後の桜島は見えておらず、黒田が噴火時の電光の様子を描いたスケッチが非常に重要だと当時の新聞にコメントが残っていることから(大阪毎日新聞, 1月20日発行)、噴火直後の様子を描いてくれるよう大牟礼や山下に依頼したものと思われる。黒田は噴火の様子をスケッチするため、何度か山下や大牟礼らと桜島へ赴いており、黒田と山下による桜島噴火の様子を描いた油絵は、鹿児島市立美術館や鹿児島県立博物館にも数枚残されている。

これら3枚の絵は、東京帝国大学地震学教室に飾られており、1971年に科博の所蔵資料となったと思われるが、経年によるキャンバスの痛みや汚れ、カビが見られる。理学分野において、教育・研究材料として当時の災害を知るための貴重な資料というだけでなく、美術分野にとっても、鹿児島洋画壇の祖である大牟礼南塘、黄金期を作った山下兼秀によって描かれたこれらの絵は大変貴重と思われる。今後、貸出の問い合わせが期待されるため、科博館外での展示に耐えうるよう修復を行うことを検討中である。美術品としても、今後多くの方々目に触れる機会が増えることが期待され、過去の火山災害を知ってもらえれば幸いである。この桜島噴火の油絵は、科博の企画展「標本づくりの技」(会期 2018/9/4~2018/11/25)において、ひと月ずつ展示する。

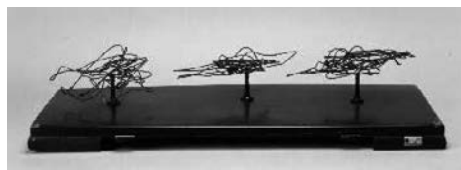


図1: 関谷清景の「地震動ノ性質ヲ示ス雛形」



図2:
大牟礼南塘による櫻島噴火の油絵